

ドイツの育児書を覗いてみて

先日ある会合で、僕と同じくらいの年齢のふたごのお嬢さんをお持ちの方と言葉を交わす機会がありました。お子さんが僕と同じくらいですから、ご本人もちょうど僕の母と同じ世代の方だと思います。その方もおっしゃっていたのですが、昔は本当にふたごについての情報がなくて苦労されたそうです。ふたごの育児についてもですし、また母親本人のさまざまな医学的問題についても情報がなかったようです。僕の母親も、色々なことがわからず、最終的には妊娠中毒で大変だったそうです。さらに彼女は実家での帰省出産をしませんでしたので、その苦労は計り知れなかったでしょう。だから、今でも昔のことを話すと涙ぐむのかもしれませんが。（頭がまったく上がりません。）

でも、ここで僕が言いたいのは、現代の母親たちはふたごについて比較的情報が行き届くようになっているので昔に比べたら楽になったということでは毛頭ありません。現代には現代で、地域共同体や親族関係の弱体化、あるいはパートナーの労働強化による、昔にはなかった別の新たな苦労があるからです。僕が言いたいのは、そうではなくて、多胎児を授かった家庭には、やはり、そのときそのときに必要な情報や援助が、地域や時代に即して、それぞれの家庭の事情に応じてあるということです。

さて、多胎児をもつ家庭を対象として行われた「一番必要な援助はなんですか？」という調査の結果に驚かされたことがあります。そこでは一番必要な援助として経済的な援助が一位になっていたからです。僕は緊急を要する育児援助が一位を占めると予想していたので驚いたわけです。でも、考えてみればこれは当然です。緊急な育児援助はもちろん必要ですが、長期的に見れば経済的問題は深刻だからです（そういえば、うちも昔はド貧でした）。特に、高校から大学にかけての10年間くらいの苦労は並大抵のものではないでしょう。時間差ではなく、同時にいろいろな経費がかかるのですから。（日本もドイツのように、18歳まで所得制限や国籍条項なしに児童手当：一人月額約2万円がもらえるといいなあ。）

では、情報と言うことではどうでしょうか？みなさんにはいろんなチャンネルや情報源があって、比較的多くの情報が手に入るのではないのでしょうか？また、みなさんにはどんな情報・アドヴァイスが必要でしたか、あるいはどんな情報・アドヴァイスが役に立ちましたか？実は、僕は数年前によその国ではどうなんだろうと思って、ドイツのふたご育児書を集めたことがあります。すると、日本でも天羽先生の本や各地の多胎児育児サークルが作ったパンフレットが実体験に基づいて書かれていますので、大いに参考になっていますが、ドイツでも比較的定評のある育児書はふたごの母親によって執筆されています。ここではリタ・ハーバーコーンさんとマリオン・フォン・グラートコヴスキーさんの名前を挙げておきますが、特に今日は後者のフォン・グラートコヴスキーさんの本についてほんの少しだけ紹介したいと思います。彼女は、『ふたご』（1992年創刊）という月刊誌の編集もしているドイツにおけるこの道の第一人者です。

フォン・グラートコヴスキーさんの書いた10冊近くの中でも特に僕の目に付いたのは、以下の3冊の本です。『ふたごの両親のための教育の手引き』、『ふたごは語る... 子ども時代、青春期、人生』、『ふたごの母は語る...妊娠、出産、ふたごとの日常』。

まずは、『ふたごの両親のための教育の手引き』を紐解いてみましょう。日本で出版されたものと比べてみると、いくつかの特徴があるように思われます。まず、意外にも妊娠・出産についての情報が少なく、むしろしっかりと教育の部分に紙数を割いている印象です。このことは同じヨーロッパ出身のレーネ・ノロウさんが書いた『ふたごの妊娠・出産・育児』（ビネバル出版）と比べても目立ちます。もちろん、

フォン・グラートコヴスキーさんの本においても、単胎とくらべた問題点やリスク、あるいは逆に単胎とほとんど同じであることは述べられてはいます。でも、細かい周産期のことは言及されていないのです。それに比べて、出産後のこと、特に幼稚園・保育園へ行ってからのアドヴァイスは充実しています。どのように個性の発達や自覚を促していくか、ふたごは同じではない、公平さをどう維持するか、特に思春期における競争心や軋轢について、学校の過ごし方、もっと大きくなってからのこと、そして対偶者の死の問題すら丁寧に扱われているのです。このことは、教育の目的が、一人の成熟・自立した社会的存在としての人間の育成とはっきりしているドイツらしい構成ですし、死の問題などを逃げずに正面から取り組んでいることに共感を覚えます。

次に『ふたごの母は語る…妊娠、出産、ふたごとの日常』ですが、これは日本のお母さんたちの手記や経験談と似通ったもので、30人の母親が自分の経験を語ったものです。やはり、日常のさまざまな苦労や多胎児を授かった家庭の喜びなどそのまま日本のお母さんの心情に通じるレポートが次々と目に飛び込んできます。この手記集を編集したときから彼女の頭にあったのが、『ふたごは語る…子ども時代、青春期、人生』でした。実は僕は、成長過程にあるふたごの仲間に、その過程の局面局面において、ちょっとでも参考になればと思って、ふたごが出てくるいろいろな本の紹介をしていますが、こうしたふたごの仲間の体験談のアンソロジーがあれば、もっともっと直接的にふたごの仲間たちの心に響いていくと思います。そういえば、ある三つ子のお母さんから、思春期に差し掛かるであろう子どもたちの参考になる本はありませんかとついこの間質問されたところでした。

この本の中では、24才から84歳までの21組のふたご（男女、一卵性二卵性さまざまなペア）が、自分たちの幼年期、青春期などを振り返っています。死に別れたペアもいますし、けんかしたり競争したペア、まったく競争心のなかったペア、ふたご大会に出席するのを楽しみにしているペア、ふたごの親になったふたごなど色とりどりです。このようなさまざまな人生を歩んだふたごの仲間の手記を読むことは、成長過程の只中にあたり、悩みを抱えているふたごにとって大きな励ましになると思います。どんな形になるかわかりませんが、いつかこうしたものを作りたいなあと胸を熱くしました。

『ツインズぷらす』第7号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正